

PHD

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

LETTER

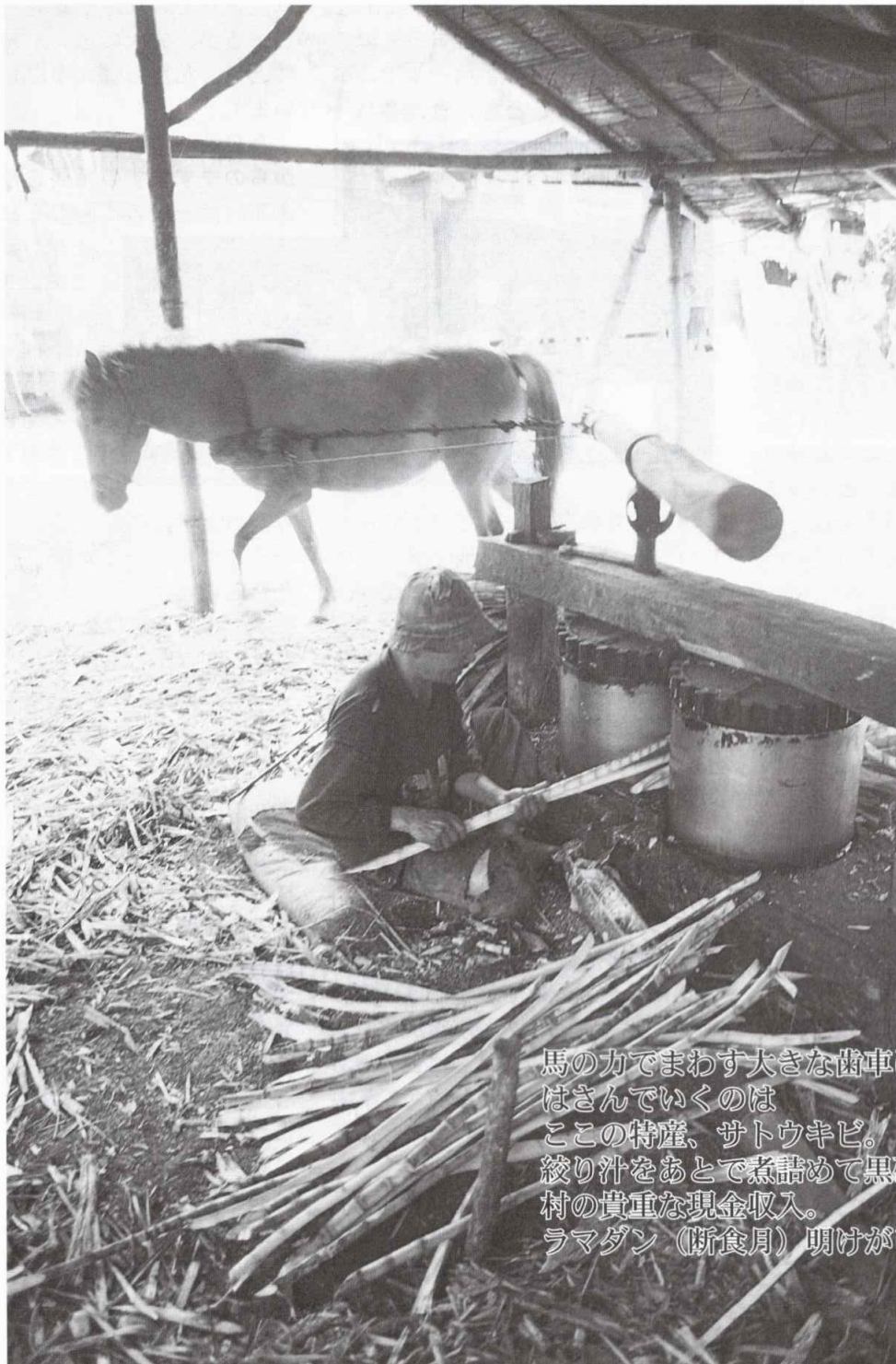
81

2001・12

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり (Peace) 健康づくり (Health) を担う人材をつくる (Human Development) 運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人：藤野 達也
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL 078-351-4892 FAX 078-351-4867
e-mail phd@po.hyogo-iic.ne.jp
定 価：100円

- 古参職員フジノに聞け!
スペシャル「フジノ、アメモリ氏に聞く」・・・ 4-5P
- 研修生レポート・・・ 6-7P
- 夏のスタディツアー報告・・・ 8-9P



馬の力でまわす大きな歯車には
はさんでいくのは
ここの特産、サトウキビ。
絞り汁をあとで煮詰めて黒砂糖。
村の貴重な現金収入。
ラマダン（断食月）明けがいい値になるそう。

インドネシア、西スマトラ州タベ村 撮影：FUJINO T.

20周年記念行事 アジア・南太平洋地域づくりシンポジウム

「共につながり、共に生きる私たち」報告1

今井鎮雄理事長挨拶

世界が平和になるために、共に生きることを実践している人に感謝状を差し上げようと国際ロータリーが考えたときに、ネパールで活動されてきた岩村先生にということになりました。サンパウロでの授賞式の時に先生がおっしゃったことは、世界の指導者同士のつながりだけでなく、草の根の人たちが心を通いあわせ、分かち合う生活をするということでした。そしてそれを実現していくためには、世界が平和でなければならない、さらに先生は医者ですから、多くの人が病気に苦しんでいるのを見て、健康が大切だということを感じました。それを実現するためには教育を充実させ、一人一人の人間性を開発していくことが大切。これを英語で並べて、Peace、HealthそしてHuman Development、その頭文字をとったPHDという運動をはじめたいと岩村先生が言われました。私はそのことのためにお金を集めますからやりましょうということになり、兵庫県下のいろんな方が応援してやろうと輪が広まっていったのでした。

こうして歩みだしたPHDは一年間日本でのいろんな経験と帰ってからのフォローアップを形として事業を始めました。次に多くの人たちに理解を得るために、研修生の暮らす状況を知っていただく、スタディツアー

もプログラムに加わってきました。篠山から支援をして下さっていた皆さんが篠山ナマステ会を立ち上げられたのも、そんな過程からできたことです。

この20年同じことをくり返してきたのではありません。その時代の変化にあわせ、アジアの仲間として、対象地域の方々と相談しながらプログラムをすすめてきました。PHDというものは一つ所にとどまるものではない、岩村先生のネパールでの奉仕から芽ばえたことが、今、ネパー



ルの人たち自身によってすすめられています。これから各地でもこういったことが広がってくるとありますが、これからの20年はどうしていくのか、私たちは次の段階を考えなければなりません。岩村先生が考えた他の人と一緒に生きること、生きることとは分かち合うこと、という精神をどのように続けていけるのか。これを考

えることがこうして集まっていた目的です。それを20周年のお祝いにしようということです。

本日は日頃いろいろところで協力していただいている皆様、研修生のお世話をいただいている方々、募金に応じて下さっている方々などにお集りいただきました。岩村先生がネパールで奉仕を始めた40年前には生まれていなかった方もおいででしょうが、先生の思いが続いていくことを、私たちは大事にしたいと思えます。

今日を一つの区切りとして、これからのますますの発展を考えております。尚一層のご協力をお願いしたいと思います。

この会をもつにあたり、事務局の藤野さんと感謝状をお出ししようかどうか考えました。毎年ご寄附下さる方、多額のご寄附を下さ

った方だけなのか、そうではない、いろんな形でのご支援がある、そんなことを考えたら一万枚は感謝状を書かなきゃならない。ならば、今日ここで口で感謝状にかえようと。

今日はそんな意味からもお礼を申し上げます、「ありがとうございました」と感謝状にかえさせていただきます。

年末募金のお願い

記念行事に集う人々の姿は、PHDが20年の歩みの中で着実に草の根の国際交流を築き上げてきた象徴であり、多くのボランティアによるご協力も、日本国内で地域や世代を越えて草の根のネットワークを構築してきた証拠と言えるでしょう。

その一方でPHDの願いである「平和で健康な共に生きる社会」とはまったく逆であるテロや戦争が続いています。今回の一連の出来事はPHDと直接的関わりは薄くとも、PHDの根幹に深く関わる問題です。多様な民族、宗教の人々が互いの個性を尊

重し合って生きる社会、それが「共に生きる社会」であると思います。

その意味において、PHDが目指す道は平坦ではありません。記念行事でも活動に関する多くの課題が指摘されました。まずどの課題から取り組むのが問われています。

言うならばPHDは、新しい挑戦とこれまでに築いた活動を大切にすることの両立を求められています。この課題にみなさんからのご支援無しで取り組むことはできません。

地味ではあってもPHDを進める草の根の人々の交流が、平和をもたらす有効な手段だと信じています。事業の充実のために今年もみなさまのご協力をお願い申し上げます。

東西南北 問題解決 取組日記

8月×日

7月末から2週間弱、パプア・ニューギニアヘスタディツアーを兼ねて総勢18人で。面接、フォローアップを行い、村には班に分かれて滞在。例年に較べて雨が強く、現地側より時期の延期の提案を受けた程だったが、やっぱり毎日雨で、歩いての移動に大苦労。

村に到着する前、無線の連絡で訪れる地区のスーパーマーケットが2日前に7人組の強盗に襲われたという。お店が閉まっているといけなくて町で食料を買い込んで行ったが、現金を奪われただけとの事で、お店は営業していた。オーナーは95年に震災時の慰問で神戸にも来てくれたテオさん。町の治安の悪さは知っていたが、それが村にまでも及んできている。

町とつながること、商品経済とつながることはいいことばかりではない。

8月〇日

PNGに続いてインドネシア、西スマトラ州へ。こちらにも人選、フォローアップを含むスタディツアー。

はじめは研修生を迎えて3年目となる山の村タベへ。3泊してからおつきあい15年目の漁村パシルバルーへ。若い漁師さんたちとの夜の会合を終えて外へ出ると、参加者の2人が「私の履物がない」と言う。しばらく探すが、どうも村の誰かが取って行ってしまったようだ。アリさんをはじめこの村の研修生は困った表情だ。ここは町へも近く、村人もお金に慣れ、物への知識も豊富だろう。ただし、それを自分のものとする手段については、十分ではない。村をとりまく状況の変化は、村人の生活や気持ちも変えていく。それにはどう対応していくのか、これからの課題だと思う。

9月△日

20周年のPHDを神戸新聞が取材してくれると言う。しかも帰った研修生とその後を記事にしたいとのこと。社会部の内田記者のお伴をして北夕

イの村へ。今年には神戸にある頌栄人間福祉専門学校と共同で学生の実習を行ってきたが、その学生、寺田栄さんの滞在先のメーサリアン、シードンチャイ村をまず訪ねた。3月に帰ったばかりのブンシーさんが村のおばちゃんたちをひっぱって、20周年行事の記念品の製作を行ってきた。その様子をインタビュー。ここではプリチャーさん(85年)の話聞くことも目的だったが、2泊3日の滞在中、電話、訪問と何度も面会を試みるも果たせず。お店の仕事で超多忙。日本に戻ってからの電話でやっと話げできた。あの忙しさは日本人以上。ちょっと心配。



コマさんに取材する内田記者(ボッケオ村)

一旦、チェンマイに戻ってから日帰りボッケオ村のコマさん(87年)に会いに。たびたび報告のイチゴ畑で話を聞く。「イチゴがうまくいって、お金が入るようになった。でもとても忙しい。これがいいのか、わからない。」と。彼を20周年行事に招いて、この話をしてもらった算段だったが、奥さんの10月出産に加え、ニューヨークのテロ事件で、彼が飛行機を嫌がり、来日はとりやめに。

(このときの連載記事をご希望の方は、郵送料80円分の切手をお送り下さい。コピーをお届けします。)

10月6、7、8日

パプア・ニューギニアの2人のゲストは間に合わなかったものの、6、7日の20周年記念行事は500人を超える方々が全国から集まり盛況、お迎えしたボランティアの総

勢200人以上。8つの分科会ではつっこんだ話し合いが行われた。

6日の夕方には、研修生がお世話になっている農家から提供してもらった有機農産物を使い、料理ボランティア30余名の手によるアジア料理で交流パーティー。使い捨ての食器をださないですむようにと、参加者にはマイカップ、マイお皿、おはしをお願いしていた。忘れた方のためにキャンプ用の食器を念のために用意していたが、多くが役立ってしまった。

さらに、パーティーと昼の食事の時の飲み物を寄贈品とはいえペットボトルで用意してしまい、環境、ゴミ、リサイクルを気にかけながらの不徹底を大反省。せっかくの呼びかけの場にもできたのにと、反省会で振り返った。話し合うだけではなく行動が伴わなければ。

淡路島の夢舞台で行われたAsia Pacific Youth Music Workshopの開催日8日の未明、米国によるアフガンへの報復がはじまってしまった。出演者と会場との話し合いでも当然取り上げた。最後にフィリピンのトツさんのサクソとシンガポールのジェレミーさんのピアノのデュオによるジョンレノンのイマジンで締めくくった。

テロ、米国の報復、日本政府の動きに対して、PHD協会も加わる関西NGO協議会から声明を小泉首相宛に送った。

戦火のあるところ、草の根の人々の地域づくりへの取組は消し飛んでしまう。まず、平和がなければ。あらためて思う。そのために私たちにできることは何だろうか。

総主事代行 藤野達也



演奏の後、音楽、社会、平和について話しあう

古参職員フジノに聞け！スペシャル「フジノ、アメノモリ氏に聞く」

〆PHDを評価する〆

後編

第三者による評価をアユヌス＝仏教国際協力ネットワークの助成をいただき昨年実施しました。前号に引き続いて評価担当者である雨森孝悦さん（日本福祉大学経済学部助教授）のお話をお伝えいたします。

雨：研修生が日本に研修に行っていなかったら、どうなっていたかという視点からの比較はあり得ます。そう考えると、PHDの研修生はよくやっていると評価できるかも知れません。ただ、村のワーカー、モチベーターとしての期待があるとすれば、パフォーマンスは悪いかも知れません。

フ：1年間お世話をしていると、この人の力量というものがある程度わかるわけです。この人の能力の中で、かなり頑張っている、でも絶対評価としてはこの人はここなんだからということで二重の評価があるわけです。

効果を考え、NGOワーカー等を研修生と呼べば期待するものも高く設定できるし、効果の高まりも計算できるし、影響も強い。しかし、それがPHDのやるところなのか。

雨：地域作りを中心に考えるのであれば、それを効率的に押し進めるのにどういう人材を選び、伸ばし、地域で動けるようどう支援するのか。どのように体制を作るか。地域作りの戦略をたてるのか、という発想になると思います。PHDを見ていると必ずしもそのような発想に立っていないわけです。あえて村びとを選ぶところがそうです。

フ：誰を呼ぶのかというところで、例えばJICA（国際協力事業団）や国が中央の人やアカデミックな人を呼ぶということは今までしてきたし、しているわけです。それに届かない人達が実は一番困っているのです。本来応援すべき人達です。今までは外からアプローチする人をトレーニングしてきたわけです。当事者をトレーニングするという発想は最近になってやっと評価されるようになった。欧米のNGOでも今では外の人間が入って行くということはせず現地の人によるアプローチをとっている

ます。その流れからいくと、うちは発想的には同じではないでしょうか？

私たちはあくまでも媒介の人であって、主人公ではありません。けど草の根の人を年に4人トレーニングするということではそれがどれだけの力になるのかということはよく思うことです。

雨：4人という人数は多くはないですが、突破口がひろがれば、モデルとして人数が増えることもあるでしょう。だから問題はモデルとして立つかどうかです。当事者を鍛えるということは、考え方として非常に面白いですね。外からNGOが入ってくるのではなく、中から人を育てる。その発想は素晴らしいと思います。しかし中の人ならではの困難を抱えている人もいます。思うように活躍できず、悩んでいるとすれば問題を突破することを一緒に考えていかなければいけない。そこがなかなか時間がなく、できていないのではないのでしょうか。

フ：村の人が一緒に相談して、となると、集まりをもつわけですが、集まりをしたら内容をきちんとして次に残していかないと。お金に関しても、皆からお金を集めて、それをある目的のために使う。その記録等も、どんぶり勘定のところがあったりして。こういうところでどうやっていくのか。私たちが行けば会がもたれるが、そうじゃないとどれだけ会をやっているのか。帳面を作ればいいのかということとそれだけではない。すぐにお金になることでないとなかなか集まらない。これが、村の普通です。

雨：これは普遍的な問題ですよ。

フ：日本でもそうですよね。そこどこまで期待するのか。彼らがどこまで必然性を感じているのか。

雨：長期間強い動機を持ち物事を進めていく。現状を意図的に変える。これにはすごくエネルギー、ビジョ

ンがいる。なかなか普通の人に期待できない。だから特別な装備をつけてはいけないと思います。

フ：帰国直後は頑張るが、だんだん村の人の反応からやってもダメだとか空回りしたりして元気が少しずつ失われていって、数年たつとうまうまいかない人はしぼんでしまう。

雨：インタビューの結果、皆最初は頑張るが、下降線をたどる人がいる。ある割合でうまうまなくなることがあるとしても、ある割合の人はその後、生活改善の軌道に乗せる所まで目に見えるようになれば、素晴らしいと思います。

フ：そこに対して特効薬があるかという、あるならそれをフォローアップとしていけばいいが、それは個々で違うわけです。そうしたフォローアップに対して戦略だててやっているかといわれると、やりたいがどうやっていいのかわからない。我々も気持ちはあるけれど、具体的にどうはめればいいのかについては、あと20年やってもわかるのかなと。あまり自信はありません。

雨：対象地域を絞り込んで、現地に推進機構のようなもの、例えばNGOを作っておいて、村びとをモチベーターしていく、その中に帰国した研修生が入ってやっていくというのはどうですか？

フ：そうですね。情報収集のために日本の人に村に入って状況、村の構造などを見てもらう。これを積み上げれば何かできるのではと思います。日本の若い人を村に長期間派遣する。こちら側としては、現地の状況がより細かくわかりますし、また日本の人の人材育成にもなるでしょう。

雨：大学院生もフィールドが不足していますからね。

フ：学校からも受入れの要請があり

ます。村を変えることも必要ですが、日本も変わる必要がある。「社会」を視野に入れる人を増やすための養成機関になればいいと思っています。

雨：日本もアジアの一員ですから、安全な食べ物を作り環境にも優しい地域循環型の地域づくりは、日本の課題でもあります。日本でうまくいかないものを相手にしろとは言えない。日本でも実践しながら悪戦苦闘すれば、いいヒントが出てきて、そこから学んだことを元に協力することができるかもしれません。



ラニーさんにインタビューする雨森さん

フ：国外のことばかりやって、国内は何もしないのかという議論がありますが、それは違いますよね。

雨：そうですね。国内と国外の同時進行でない。日本で何もしていないのに外ばかりだといわれる。

フ：大概、そういうことを言う人に限って何もしてなかったりする。

雨：日本での研修はよく見えますが、研修生が村に戻って、日本での研修がどのように活かされているのかを見たい人もいます。最終的に何のためにしているのかを考えると、やはりそれも必要ではないでしょうか？研修生たちは彼らなりに頑張っているのですから、それが成果につながるように。そういう意味でのフォローアップは必要だし、そのための情報の充実は大切なので、頑張ってほしいですね。

もう一つ質問があるのですが。飛び越えるべきハードルをどこに設定するのか、ということです。目標は高い方がいいのですが、高すぎると越えられない。そのへんも難しいですね。

フ：時間設定もありますしね。

雨：私個人としては、土作りから始める農業、これは過去の姿ではなく未来の姿だと思います。有機農業というのは手間がかかる割に、収益性が低いので難しい。村の人はなかなか飛びつかない。そこをどう越えていくのか。布に関しても、天然染料で手織というの、所得向上を考えると難しい。化学染料の方が簡単に染まるし、布も買う方が簡単です。しかし、天然染料で、手織で、というのを残したい時、その中でどう効率を上げ、収益も上げるのか、知恵をしばらねばならない。目標をどこに置くのかということですね。

フ：村の人たちがどこまで消化できるのか。どうやって彼らの意志としてやってもらうのか。どこまで、外の人が押し付けるのか。

私たちは所得向上のためだけにしているわけではありません。彼らだけではなく私達がどう生きるのか。合わせ鏡だと思います。安全なものを食べあまり多くを欲しがらない。収入だけだと競争の世界です。日本ではそうになっています。

雨：例えば、ブランドイメージ、この製品は環境に優しいものである、だから安心であるというようなものが口コミで広がれば認知を得ることができます。だから、PHDとしてのイメージを持って欲しいなと思います。

PHDはやはり、理念として助け合おう、別の生き方をしようというものがありますよね。

フ：そうですね。アジアの人達はもう少し「得る」ということに対する努力を、私たちは「減らす」ということをしないと。

研修生の成果だけが評価の対象となると辛いところがあります。日本の人に対する呼びかけも、うちの活動の評価の対象にならなければいけないと思います。

雨：それは多くの人を追跡調査しなくては行けませんね。研修の成果だけの評価だと、成果の半分だけということになるのはわかりますし、開発教育の評価も大切です。しかしプログラムの直後の評価はできますが、

その後のインパクトはなかなか難しいですね。これはちょっと私の手にあまるので…。別の人にやってもらうとか。20周年行事で皆さんが大集合された時に言ってもらえれば、評価というところまで行かずとも、振り返りになるのではないのでしょうか。

フ：私たちは、日本の社会に対してadvocate（提言）しているといってもいいのではないかと考えています。今までは開発協力をしている団体で、開発教育もしていますと言ってきました。しかし、advocacyの団体だと言ってもいいのではないのでしょうか。そうすれば、PHDの特色が出ると思いますが。

雨：advocacyは調査研究をきっちりした上で情報を出し政策決定者に働きかけるのもあるし、市民層に働きかけたり、マスコミを通して働きかける方法もあります。対象を特定しているわけではないので、市民教育というべきかもしれませんが、adococacyのひとつの要素ではあります。

フ：皆に説明する時にどうすればインパクトが強いのか。まあ、キャッチフレーズのようなものです。当会も社会に対してものを言っているわけだから、advocacyでしょう。

雨：運動性が強いという点では、そういってもいいと思います。

フ：村の人たちだけではなく、あなたもたなくては行けない、できる場所があるでしょう、ということです。どう評価を消化して形にしていくのか。どういう方向でいくのかも考えなければならぬわけで、PHDの伝えたいことは、ますます難しくなってきましたね。

第三者に見てもらわないと、周りを見れば誰もついてこないということになりかねないですね。

雨：今回は私ともたいへんいい勉強をさせてもらいました。次のステップとして開発教育の評価をどなたかにやってもらえばどうでしょうか。

19期生 (2001.8月中旬～10月中旬)

研修生レポート

アルウィ・ファドリさん (インドネシア、男性、28才)

農業研修
6.<水上郡水上町> 吉田吉彦
7.<神崎郡市川町> 牛尾武博
8.<佐用郡南光町> 真柴三幸
(敬称略)

ナロンテッ・カムヌーンバナトーンさん (タイ、男性、20才)

農業研修
6.<朝来郡和田山町> 大森昌也
7.<愛媛県中島町> 泉精一、岡田義之
8.<水上郡市島町> 一色作郎
9.<神戸市西区> 渋谷富喜男
(敬称略)

ケユーン・カヨータさん (タイ、男性、29才)

農業研修
7.<穴栗郡波賀町> 田中五郎
8.<水上郡春日町> 中野宗嗣
(敬称略)

シコン・ドンさん (パプア・ニューギニア、女性、23才)

農業研修・洋裁研修
6.<三木市> 高橋武子
7.<篠山市> 円谷利行
8.<芦屋市> くらふとぎやらりー多田、
芦田安紀子 一滞在-西本宣之
9.<三木市> 高橋武子
(敬称略)

「村の人に売れるかなー？」

いよいよ洋裁の研修が始まったシコンさん。高校で少しミシン(手回し式)を習っていたそうですが、日本の電動ミシンのスピードにはおっかなびっくりでした。しかし、何事に対しても飲み込みの早いシコンさんは、ミシンの使い方もどんどん上手になり、真っ直ぐだけでなくカーブもゆっくりときれいに縫えるようになりました。また、型紙の原型のとり方を学んだり、大人服、子供服、かばん等を作り、洋裁の基礎がかなり身につけてきているようです。「村に帰ったら今は眠っているミシンを使って色々なものを作りたい」と話しています。

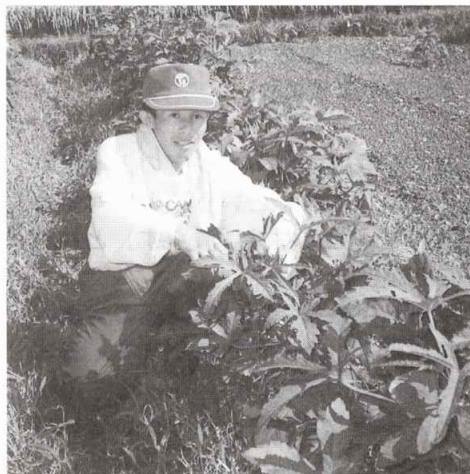


ミシンがけも余裕が出てきました。
(シコンさん・三木市)

ワラとモミガラ

前号で述べた、「鶏を飼っていても卵を取って売ることほしない」ことに加えて、藁や籾殻を利用しないというのも19期生の出身地域に共通する事柄の一つです。例えば、アルウィさんの村では、藁や籾殻はゴミとして集め、まとめて燃やしてしまっています。

研修生たちは、日本の有機農家の方々が、藁や籾殻を有効活用されている実例を見て、一様に関心を示しています。

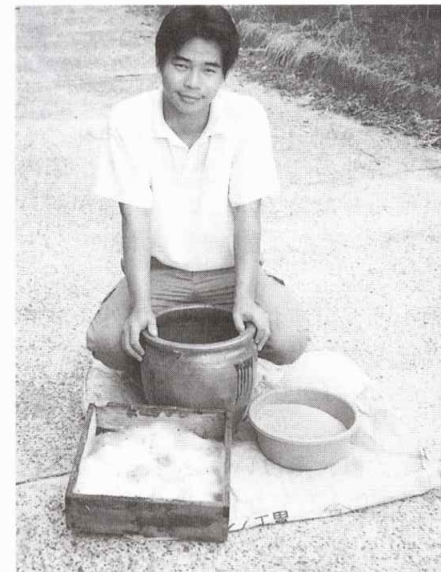


オクラの間引き中(アルウィさん・水上町)

アルウィさんは、吉田さんの所で、野菜の種蒔きの後に籾殻を一面に被せておくと、畝の乾燥を防ぎ、発芽を助ける効果があることを知り、「これなら村でも出来ます!」と。年末には他の研修生と共に、くん炭(籾殻

の炭)作りにも取り組むことになっています。

ナロンテッさんは、ポリエチレンの代わりに藁がマルチとして使えることを一色さんから教えていただきました。「村ではポリエチレンは高いし、第一ゴミが増えるのが良くないと思う。藁なら使い終わっても畑にすき込めばいいからゴミが出ない」と、堆肥の材料などをはじめとした藁の利用法の幅広さに感心していました。



「土着菌は色々使えてすごい」
(ナロンテッさん・中島町)

家畜を飼うことの意味

中野さんの所で酪農と有機農業の複合経営を体験したケユーンさん。今までは、養鶏や養豚を農業と組み合わせた所はいくつか回っていましたが、酪農は初めてです。「朝晩の搾乳は大変ですが、牛糞が堆肥になり、堆肥が田んぼや畑に入り作物を育てる、という流れは同じ。タイの家では牛(肉牛)を飼っているの、鶏糞と合わせていい堆肥を作りたい」と話してくれました。

「作ること」から「売ること」へ

「作ることについて技術的なことはある程度なんとかなる。それ以上に難しいのは、農作物をいかに売るか、ということでしょう。」これは農業

の研修指導者の方々が口をそろえておっしゃることの一つです。

研修生たちが帰国してから日本で学んだことを実践に移すとき、もちろん最初は作る段階でうまくいかないこともあるでしょう。しかし、試行錯誤の末、自分の地域にあった栽培法を確立できたとしても、それと同時にしっかりとした販路も確保しておかなければなりません。自分の家族が食べるためだけなら、上手にできたお米や野菜を眺めて満足していても良いのですが、現金収入を増やしたいのであれば、より多くの人に買ってもらうなければなりません。

こうして研修生たちは、研修中に

できるだけ出荷作業に関わったり、配送に付き添わせてもらったりして、各生産者の様々な販路の形態に触れています。また、「農作業の節目には消費者の方たちに援農に来てもらう」、「餅つきやパーベキューパーティーを開く」、「定期的に発行物を出す」など、各農家が消費者の方々とつながりを大事にする姿勢や工夫からも多くのことを学んでいます。

しかし、日本でこそ有機栽培が一つの付加価値になり得ていますが、研修生の出身地域では、程度の差こ



「日本は何でもキカイですね」(ケユーンさん・波賀町)

そあれ、まだ先の話です。そういった状況の中で、帰国後有機農業に取り組む、その活動を村人たちに伝えていくのは容易なことではありません。日本での研修も後半に入り、これからはより「売り方」や「グループ作り」といったことに重点を置いた研修を進めていく予定です。

帰国研修生短信

ーパプア・ニューギニアー

レルさん(90年度)

長い間、喘息の療養が続いていましたが、ここ最近体調がかなり回復し、村にある農業グループのアドバイザー的役割を担っています。95年から始まった共済組合作りも順調で、現在では10の村から96人のメンバーが集まっています。各メンバーからの出資金を低利で貸し付け、その収益で養鶏、養豚、漁業、洋裁に関わるものを共同で購入したりしています。

ラニーさん(91年度)

ご主人と共に彼女の出身地域のワンドカイ村で生活しています。ご主人が15頭の牛を飼っており、これを軸にした農業を行っています。ようやく家族レベルから、周りの人々を巻きこんだ活動へと広がりを見せ始めたところでした。

ハリエオさん(97年度)

2000年の夏に家が老朽化により壊れてしまったため、今年の1月から新居作りを始めています。現在は6

～7割程完成。10月から乾季が始まり、野菜や陸稲を有機栽培で作っています。鍋を使用したパン焼きは順調で、毎週土曜日に開かれる市場に出し、あっという間に売り切れになってしまうそうです。

リンダさん(00年度)

今年3月に帰国した後、出身地域のアンゴリ村から両親の住む海辺のボンガ村へ引越しました。9月から陸稲を中心に、野菜も少しずつ有機栽培で作り始めています。まずは自分たちが上手く作れるようになり、それから村の人たちに教えていきたいと抱負を語っていました。また、来年の1月からは村のお母さんたちのグループで月2回、洋裁や保健衛生を教えることになっています。

ーインドネシアー

サムスアリスさん(90年度)

1年前に新しい船を購入し、現在は10人で漁に出ています。村一番の漁師だと評判で、村の若者がみんなサムさんの船に乗りたがるそうです。

ハスマヤニさん(92年度)

村で行われる子どもの保健プログラムのボランティアをしたりしながら、保健衛生や栄養について村人に働きかけを続けています。また、週4回、バダンで日本語も教えています。3歳と5歳の2児の母親です。

ダスウィルさん(99年度)

お米、唐辛子、トマト、サトウキビを有機栽培しています。今年は堆肥作りが上手くいき、農業グループのメンバーにも教えたそうです。農業グループとのミーティングは2週間に1回行っています。5月に3人目の子供(♀)が生まれました。

アフダールさん(00年度)

帰国後2ヵ月かけて鶏小屋を作り、養鶏を始めました。平飼いの地鶏ということで、卵は1個700RP(普通は400RP、1RP=約65円)で売れるそうです。ヒヨコは1羽8000RPで150羽購入。小屋の建設資材や餌代などの初期投資も「最初は大変だが、卵が安定して取れるようになれば楽になる」と話していました。

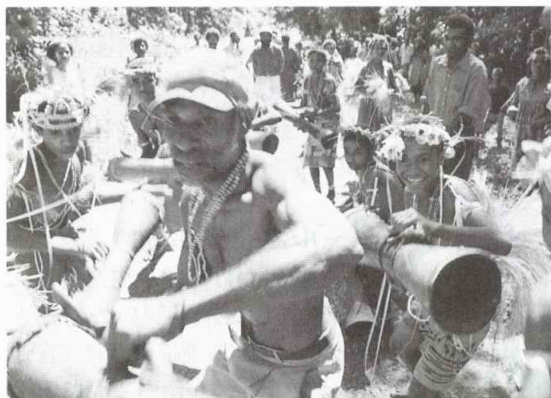
夏のスタディツアー報告

パプア・ニューギニア

「ニューギニアでのお参り」

母が亡くなる半年ほど前、うわ言を言った時期がある。「ニューギニアで…」とか何とか。はっきりとは覚えていないけれど、戦死した伯父のことだろうと思って聞いていた。ニューギニアで亡くなったことは、いつか聞いたことがあったので。確かめようと思って、お盆にお墓参りに帰った時、母の実家のお墓にも行った。そこには「東ニューギニアのロアンで戦死。26歳」と彫られていた。実家の叔父も、一度戦地を訪ねてみたいと言っていたそうだが、母と同じ年に、母を追うようにして、逝ってしまった。パプア・ニューギニアの慰霊碑にお参りして来たことを知ったら、二人ともきっと喜んでくれたことだろう。その慰霊碑の回りを、現地の人がきれいにしてくださっていた。若い命を奪う戦争。必ず「聖戦」という名の下で行われるが、決してそんなものではない。一部の人の利益のために、多くの庶民が血を流す。「死ぬ」ために生まれてきている命なんて、どこにもない。戦争を起こすのも人間。辞めさせるのも人間の叡智。命を育んできた親として、命を預かっている教師として、世の中の動きを見極める力をつけなければと思う。

(井上洋子/神戸市/教員)



ツアー参加者を迎える踊りシン

「PNGのこと、日本のこと」

辛かったのは、レイの人たちの目が村の人たちのそれとは違うもののように感じてしまったことです。ど

ことなく哀しそうで、それでいてなんとなく、視線が怖いのです。PNGでは都会にあこがれ、田舎を離れる人がたくさんいます。でも現実では仕事を見つけることは大変で、ラスカル(いわゆる強盗)になってしまう人もいます。これがPNGの抱える大きな社会問題となっています。現実を目の当たりにして、日本のこと、自分のことに思いをめぐらしました。何が大事なのか、何を大切に生きたらいいのか、発展とは一体何なんだろう、正しいことなんて誰にもわからないけれど。この国の人たちはどうなっていくんだろう、自分は彼らのために何ができるだろう、日本はこれからどうなっていくんだろう、わたしには何ができるのかな…。

(猪熊アヤノ/大阪府摂津市/教員)

「願いをこめて」

ハンディーをもつエリヌカさん、ノブさんの家を訪問。レイまで行かないと養護学校がないので、ハンディーを持って生まれたら学校にも行かず、ずっと家の中で過ごすそうです。訪問する際におみやげがあった方がいいということで、ポリラの首飾りにあやかり、折り鶴の首飾りとおかしを用意しました。鶴を折っている時は、ちょうど広島に原爆が投下された時刻でした。ハリエオさんと「さだ子の折り鶴」の話をしながら、健康と平和への願いをこめた折り鶴を作りました。

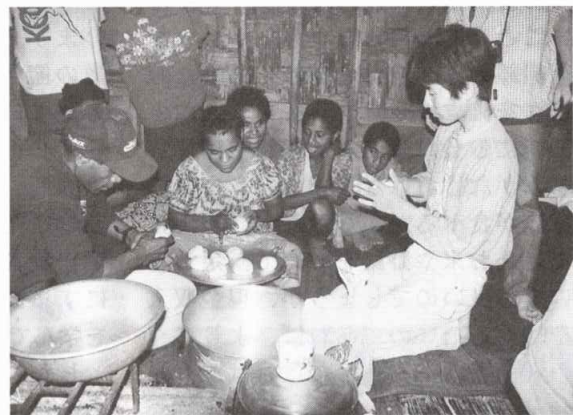
(庫田木綿子/西宮市/学校指導補助員)

「研修の成果、パン焼」

ハリエオさんのパン焼はすごい焼き方でびっくりしました。こんな簡単な器材でできるなんてやっぱりすごい。悔い残りはイーストは値段が高いので、自然でただで作れる天然

酵母の作り方を教えてあげたかったことです。一番うれしかったことは10年前の研修生レルさんが覚えてくれていたこと。昔の写真を今も大事に持って来てくれた。

(大森げん/兵庫県和田山町/百姓)



パン焼き対決!

「今度来る時は…」

あるピランコ村の人が僕に言った。「学校を卒業したら、今度は親のお金じゃなく、自分で働いてそのお金でピランコの家に戻ってきてください」…「はい！」

(落合厚志/伊丹市/高校生)

「行って分かること」

よく見ると、子供たちの手や足に傷がみられて。ひどい傷にはハエがたくさんとまり、痛々しく見えた。ここには消毒液も絆創膏もない。日本のお母さんが自分の子供にそんな傷を見つけたら、慌てて消毒して絆創膏を貼るだろう。ラニーさんの話によると、村の子供にもおたふく風邪や水疱瘡といった症状の病気があるらしい。しかし、だからといって、病院へ行くわけではない。村から病院までは車で一時間半。よほどひどい時にしか病院へは行かない。そんな時はある葉っぱを患部に貼ることで痛みをとり、完治するのを待つそうだ。日本にはたくさんの医療技術があり、PNGには有効な薬草がある。どちらも正しいし、大切なものだと思う。ここへ来る前、正直村の良いイメージは少なかった。病気に関しても施設や薬がないために命を落としているイメージだった。でも実際、

今年の夏は7月31日から8月12日までパプア・ニューギニア、8月21日から30日までインドネシアと、2本のスタディツアーを行いました。参加者は村の生活を体験し、帰った研修生をはじめ村の人と話をすることで、どのようなことを感じ、考えたのでしょうか。ほんの一部ですが、ご紹介します。

日本よりもいいところはたくさんあり、PNGでのやり方、生き方があった。何でも最初から否定するのではなく、相手をよく見て、いいところを尊重することを学んだ。

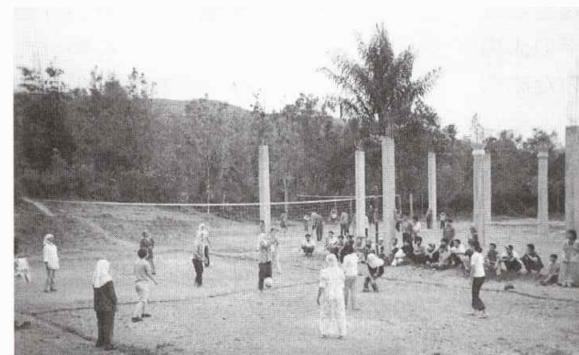
(永田法子/神戸市/看護学生)

インドネシア

「あなたの楽しみは？」

タベの人は、楽しみというのが、毎日仕事が終わって5時から始まるバレーボールをすることらしい。それが楽しみで仕事をやってるってぐらい。それであなたは？と聞かれた。答えられなかった。考えたけど、パッと思いつく事がなかった。何となく生きている奴に答えられるはずないと反省した。いっぱい色々な事を考えられてよかった。

(西村知佐子/神戸市/大学生)



意外とルールの厳しいタベ村バレーボール

「楽しかったけど・・・」

楽しかったことばかりが印象に残る旅で、とても幸せでした。でも、ゴミの問題や貧しいことなど見逃せないこともたくさんありました。ゴミはお菓子の袋やタバコがそこらじゅうに捨てられていて、まとめて捨ててあるところもあり、悲しくなった。今までは捨てたら土に還る物ばかりだったのでゴミを集める習慣がないし、捨てても回収、安全に廃棄する方法がない。タベやバシルブルーは農業や漁業を営み、特にタベは山が多く、日本人のふるさとのイメージどおりのようなきれいなところだった。しかし、インドネシアは今、経済成長に必死になっていて、問題だらけの

日本の後をいいところだけ見て追っているようで心配だ。この後見えてくる問題や、もう見えている問題は日本のものと似ているだろう。日本はせっかく先に経験しているのだから、問題が表面化しないうち、傷が浅いうちに軌道修正できるように、このまま進めばどうなるのかを警告して改善できるようにしてほしい。それをせず有害物質を出すなという資格はないと思うし、発展途上国からの反発を避けられない。自然を壊して豊かな国になったのだから、その利益と知識を使ってこれから豊かになろうとしている国を助けるべきだと思う。

(秋本圭子/西宮市/大学生)

「一生懸命」

感じた事を一つ。それは、生きる事、生活する事への一生懸命さ。私の悩みは何だったんだろう。将来の夢についてアホほど悩んだけど、悩む暇があるのなら、とりあえずやれよ、と。「人生考える事休憩中」なんて言ってる場合じゃないだろう、と本気で思いました。一生懸命を取り戻さないとダメ人間になってしまうと感じました。村で学んだこと、考え、感じた事、すべてが、これからの私の宝、お守りです。

(西村由紀子/神戸市/会社員)



「アルプス一万尺」で熱気ムンムン



漁師さんの船で「いざ、出発」

「私のしなければならぬこと」

日本で保健衛生を学んだヤニさんから、帰国後の話を聞いた時のことです。「日本では、保健のことや栄養のことに勉強しましたが、それらの知識をここで生かすのは、困難です。毎日多種類の食材を取り入れることが大切だとわかって、一品のおかずを作るのにたくさんの野菜を入れることは、経済的に不可能なのです。肉を食べられるのは、普通の家庭で1年に1度(断食が終わった時)、多くても2、3回。普段の食事もほとんどキャベツだけとかトマトだけの時もあり、それをどうすることもできません。」いくら知識を持っていても、それだけでは解決できないことがあります。そしてそれは、私とその国の歩んできた歴史や、文化や習慣を知り、深く関わろうとすればするほど、深く実感するようになるのかもしれない。では、私にできる事は何だろう？やらなくてはいけないことは何だろう？それはきっと日本に目を向ける事です。私が外国へ行って、その国の人達のために何かするのではない、その国の人達から私が教えてもらい、それを自分の国に伝える、これこそ私が最終的にしなければならぬ事のような気がします。

(松井慶子/神戸市/大学生)



PHDはムシキーとメーサリアンの2つのカレン布グループとやりとりをしています。今回はそのメーサリアングループの中心であるシードンチャイ村に滞在した、頌栄人間福祉専門学校で寺田栄さんに報告してもらいます。今までにメーサリアンからは2人の研修生、メートツ村のポーディさん(99年度)とシードンチャイ村のブンシーさん(00年度)を呼んでいます。



布グループ「ルチョコ」のメンバーと寺田さん(中央)

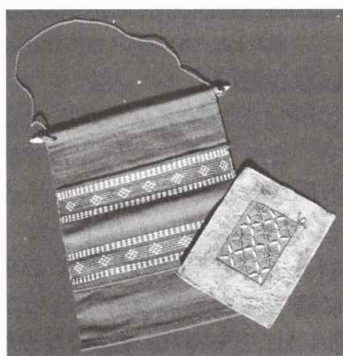
かっていないように思えました。例えば、一旦引き受けた記念品の製作でしたが、7月下旬に多くの方が「カードは作らない」と言い始めました。小さな物は作りにくいという理由でした。メンバー全員で協力することがなかなかできず、ブンシーさんは困っていました。何度かミーティングをひらき、最終的には期日に間に合うように記念品はでき上がりました。

メンバーの最大の問題は現金収入が少ないことでしょう。大半の人の収入源は農業ですが、小作のため収穫高の半分を地主に渡します。そこで現金収入を得るひとつの手段として、布を織り活動をしているわけです。しかし、タイ国内で山岳民族のハンディクラフトが流行っていて大量に出回っており、なかなか売れないという状況があります。そのような中で、メンバー達は収入を増やしたいと思っています。そのためには自分たちが考え、動く必要があると意識することが不可欠だと思いました。』

寺田さんの報告から現在のグループの状況と記念品作りの様子を覗うことができました。現在の状況を変えたいならば、自分たちが考え、動く必要があると気づいてもらう。このことはPHDが目指していることです。村の状況を把握し、メンバーとの話し合いを重ねていくことが必要です。

ムシキーとメーサリアンのグループに20周年の記念品としてレターラックとカードを作ってもらいました。記念行事の当日、会場で参加者の方

にさしあげました。レターラックは今まで商品としてあったのですが、カードを作ったのは初めての試みでした。サンプルを送り、何度かやりとりをしての作業でした。この作業は商品開発として次につなげて行けるものになったのではと思っています。今回はメーサリアングループを中心に報告しましたが、ムシキーグループもがんばっています。グループとしてしっかりと機能しており、今回の記念品の作業もスムーズにいったそうです。メンバーそれぞれの特技を生かし、布を織る人、ミシンをかける人など、分担作業で進めたそうです。メーサリアングループにグループとして先輩となるムシキーから学んでもらってはと、2つのグループの交流を考えています。

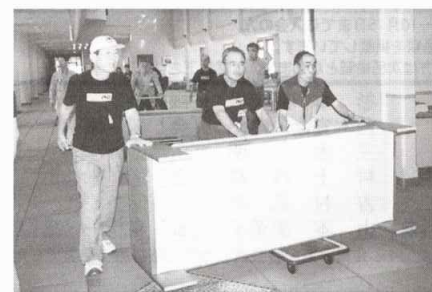


記念品のレターラックとカード

*「ルチョコ」の意味は3つの石からなるかまどです。このかまどは石が3つなければならず、この3つの石を布グループ、PHD、布を買ってくれる人に例え、どれが欠けても私たちの関係はなりたなくなる、仲良くやっぺいこう、という思いがこめられています。



開場を前に打合せをするボランティア



会場設営や駐車場整理は神戸市シルバーカレッジロビーの会の皆さんが担当



指導農家から届いた有機野菜をバザーで



トルカリ、サモサ、アドボ等々、調理班は大忙し



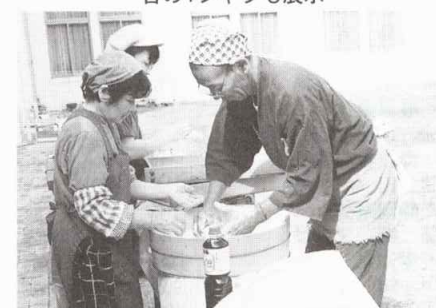
Tシャツ、エハガキ、書籍も販売



昔のTシャツも展示

グラフ20周年行事

ご遠方、ご都合がつかなくて、当日おいでいただけなかった方に当日の様子を写真でご紹介します。今回は準備のところから…。



中庭では指導農家吉田さんによるもちつきも



さあ受付開始



岩村先生も史子夫人と到着

PHD NEWS

◇会費・ご寄附寄託状況

2001年 8月	114件	1,698,123円
9月	91件	1,418,307円
	205件	3,116,430円

以上の通り皆様より多くの会費とご寄附を頂戴しました。皆様のご協力に厚くお礼申し上げます。

◇(株)コープエイシスよりご寄附

今年はPHDの20周年ですが、同じく20周年を迎えた株式会社コープエイシス代表取締役社長北山善八様より20周年記念として多額のご協力金をいただきました。感謝をもって、これからの事業に用いさせていただきます。

◇今年も感謝、自動車総連より福祉カンパ

11月7日、東京都港区の自動車総連本部において2001年福祉カンパの贈呈式があり、今年も多くの組合員の皆様のお気持ちをいただきました。11月28日には第19期研修生もお礼と報告に何うことになっています。ありがとうございます。

◇西日本研修旅行

2002年1月中旬から2週間の予定で第19期生の西日本研修旅行を予定しています。今回のコースは次のとおり。
神戸ー宮崎ー鹿児島ー熊本ー大分ー福岡ー山口ー広島ー島根ー岡山
詳しくはお尋ね下さい。

◇第20期生ホストファミリー募集!

2002年4月に来日予定の研修生3名の滞在家庭を募集します。

期間：2002年4月から1年間。始めの6週間は毎日、以降月平均7日程度。
場所：神戸三宮まで1時間程度で通える範囲。
経費：当会規定の食費、滞在費をお支払いします。

研修生はビルマ(男性)、タイ(男性)、インドネシア(女性)から来ます。

詳しくは事務局までお問合せ下さい。

○月×日のPHD協会

今回は10月6、7日の20周年事業
特集です。(ばたばた順)

職員 芳田 受付を中心に両日、会場内を走りまわる。日頃の運動不足を一気に解消かと思えば、ヨソ行のヒール靴で足の裏が痛くなる。

国内研修生 笹間 研修はon the jobで。20周年行事の遂行は彼女のとりまとめがあつてこそ。年上の運営委員に囲まれ、これまた勉強。

職員 納堂 初日のパーティ料理の準備に大わらわ。大好評の料理を作って下さった裏方の皆さん、トゥクトゥクのしげみさんに大感謝。

職員 古本 当日の担当はバザーとお泊り組のご案内。バザーは予想以上の売上げにホクホク。百人程のお泊り対応はバタバタ。

職員 伊藤 会場の一室に臨時事務局をしつらえる。他の職員はとびまわってて所在がつかめないの、なにかと問合せが集中で右往左往。

職員 藤野 一度に10人を超える海外ゲストの招聘手配は大仕事。ビルマからは会の当日朝に着。PNGは結局1週間遅れ。ふっ。

職員 山西 分科会では「人づくり」を担当。経験豊かな発題者の顔ぶれ、そして参加者からの活発な意見に、時間がもっと欲しいとの声。

編集協力：増本一朗

PHD会員制度のご案内

終身維持会員： 1口10万円（任意の口数）
PHD会員： 年額 1口5千円（任意の口数）
友の会会員： 年額 1口千円以上任意の額

ご寄附に対する免税の特典

当法人は特定公益増進法人としての認定を得ていますので、ご寄附に対する下記のような特典があります。

寄附者が個人の場合

寄附金合計額（所得金額の25%未満）マイナス1万円が寄附金控除額（所得総額から控除できる額）となります。
（例）1000万円の所得の人が250万円を寄附されると249万円の寄附金控除。

寄附者が法人の場合

寄附金合計額が一般寄附損金算入限度額の2倍未満までが損金扱いとなります。
（例）資本金10億で、その年の所得が3億円で1年決算の会社の寄附金の損金算入額は1000万円未満まで（一般では500万円）。

郵便振替口座

01110-6-29688
財団法人ピー・エイチ・ディー協会

書き損じハガキ等報告

(2001年8月～10月集計)

キ	1,859枚	79,059円
カード	27枚	14,050円
イドカード		0円
		6,404円
		99,513円
の累計		420,374円

新規会員・寄付者ご芳名は、個人情報保護のため掲載していません。